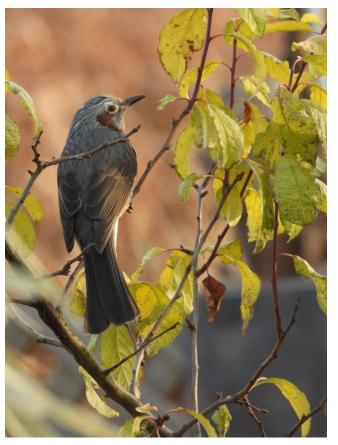
〈手あたり次第のヒヨドリ〉



ヒヨドリが畑のプルーンの木に止まって いた。"夕日を浴びながら一休み"、のよ うに見えたが、あろうことか、プルーンの 葉を食べ始めた。すでに黄色く枯れ始めた 葉っぱであるにもかかわらずだ。よっぽど 食べるものに困っていたのか、単なるいた ずらなのか分からないが、食べていること は確かだ。つい先だっては庭の柿やミカン を食い荒らしたばかりで、それがなくな り、ついに口に入るものならなんでもと追 い詰められた結果の悪行か?厳寒期に入る といよいよ食べものがなくなり、ついには ハクサイにまで手を出すようになる。トウ が立ち始める柔らかい芯の部分をつつき始 める。食い散らかした後は、必ずといって いいほど"お土産"を置いていく。ホント に始末に負えない奴だ。 "ピーヨピーヨ" とうるさく鳴くぐらいは愛嬌だが、ここま で悪さをすると、つい追い払いたくなって

しまう。今年は8月の猛暑でハクサイの出来は良くない。食い荒らされる前にネットを張っておこうと思う。それに比べて、"ツグミ"の健気なこと。地面をちょこちょこ歩きながら落ちている実や虫をせっせと探してはひっそりと食べている。遠くシベリヤから渡ってきた強者なのに気は優しくヒョドリに追い払われてしまう。カラスもヒョドリも人間には嫌われ者だが、そうやってしたたかに生きていく能力を身に着けることは"種の保存"にとって必要不可欠なことなのだろう。"にっくきヒョドリ!"と目くじらを立てるだけでなく彼らの"生きざま"を見習うべきかもしれない。今日は大晦日、心穏やかに・・・。



